

## 学生時代の思い出

大川支部 教育・昭和44年卒 白井 加代子

私が、香川大学学芸学部に入學したのは、昭和40年の春のことでした。「婚期が遅れる」ということで、大學に行くことに反対する親戚もいましたが、「これからの女性は勉強しないと・・・」という両親の強い後押しもあって、あこがれの大學生活を始めることができました。今では考えられないと思いますが、高校時代の制服を着用して入學式に出席しました。大學に通えるだけで満足だった私にとっては、服装のことなど問題ではありませんでした。前川学長さんが、式辞の中で、「皆さんを育てるために、年間数十万円の税金が使われています。」とおっしゃられたのが、今でも心に残っています。こうした国の配慮があつてか、当時の国立大學の授業料は月額千円という安さでした。

携帯電話などなかった時代ですから、大學から学生への連絡は、すべて、校門を入った所にあつた掲示板を利用してなされていきました。「本日の○校時、○○教授の○○概論は、休講」というような連絡も掲示板でなされました。休講になった時には、芝生がはられた運動場に寝ころがって読書をしたり、友達とおしゃべりをしたりして過ごしました。

芝生の北端に、木造平屋の学生食堂がありました。うどんやランチがあつて、うどんは、確か一杯20円程度であつたように思います。貧乏学生にとっては、たいへん有難い値段だったので、よく利用しました。

たくさんあるサークルの中から弓道部を選び、入部しました。道場は、経済学部構内にあつたので、経済学部の洗面所を時々利用しました。当時、経済学部の学生は、ほとんどが男性だったので、洗面所には鏡がありませんでした。ある時、前川学長さんと洗面所でお会いしました。「女性が使用しているのに、鏡がなくては困りますね。」とおっしゃって、その場を去られました。何日か後に、再び経済学部の洗面所に行って驚きました。そこには、真新しい鏡が設置されていたのです。前川学長さんの学生に対する細やかな配慮に感動すると共に、こうした温かい心づかいのある大學で学べることに幸せも感じました。

研究室は、理科に所属しました。理科研究室では、長期休業を利用して、よく海や山に現地学習に出かけました。学年の枠を超えて、しかも、宿泊を伴うことも多々ありました。

また、実験や観察のために、友達とインスタントラーメンを食べながら、夜遅くまで実験室で頑張ったこともありました。

このように、4年間の大學生活で、学部や学年を超えて多くの人と出会いました。こうした出会いの一つ一つが、現在の私の人生に彩りを添えてくれています。母校に感謝です。